

孤高の大作と向き合う —発表当時の横山操《雪原》評から—

「生れ故郷越後の山水を主題にして、金、銀、墨をもって第一回個展を開きます」⁽¹⁾

横山操(1920-1973)は1962年、展覧会への出品予定作品を縮小するよう求められたことを契機に、1940年の初入選以来、発表と研鑽の場としてきた青龍社を脱退しました。上に引用した一文は、脱退の翌年である1963年2月に開催された個展「越後風景展」の案内状に記されていたものです。既に画廊や百貨店での個展を複数回経験していたにもかかわらず「第一回個展」と銘打った背景には、敬慕する川端龍子のもとを離れて孤独に日本画表現を追究しようとする、並々ならぬ決意があったのでしょう。

その中心に据えられた作品が、当館が所蔵する《雪原》(図1)でした。幅6メートルを超えるこの大作の寸法は画廊の壁面の大きさに合わせて決められたといい、『芸術新潮』1963年3月号に掲載された写真を確認すると、少なくとも右辺と上辺は隣の壁と天井に接していることが分かります。水墨によるたらしこみや、金

箔の上に胡粉を引いて白を輝かせる工夫など、直前の作品と比較して技巧的な表現が際立っているのも特徴です。

《雪原》は、人々の眼にどう映ったのでしょうか。以下に当時の美術雑誌に掲載された、3名の美術評論家の展覧会評を引用します。

富山秀男は、題材と構成に類似点のある1959年の作品《峡》(図2)などとの比較から「画面のリズムに対する細心な配慮や技術の細かさなどによって、著しく叙情的な傾向を深めている。」と、作風の変化を認めて新たな展開への期待を述べています⁽²⁾。中原佑介は、青龍社脱退までの顛末を念頭に置いてか、近代以降の絵画作品の大きさの問題を概説したうえで、横山の作品には「屏風絵とか襖絵とは、別種の大きさの感覚をしめす」空間と視点があるとして「この画面と人間とを対等におこうというのは、ひとつの大きさの観念の自覚であろう。」と論じています⁽³⁾。他方で、三木多聞は「細く鋭い線描、水墨のたらしこみ、箔など多才ぶりを発揮しているが、かつての野性味はうすれ単に実用面でのレパートリーの広さを、誇示した感が深かった。」と、新作の傾向に批判的です⁽⁴⁾。

「越後風景展」を境に横山の作品は、現代社会を題材にとってダイナミックに絵具を乗せていく作風から、静謐さ⁽⁵⁾が漂う水墨表現を主体とする作風に大きく転換しました。このような変化に対しては、上に挙げた展覧会評のほかにも様々な反応があったものと思われます。しかし、横山は世評に流されることなく制作を続け、「越後風景展」のわずか4ヶ月後に開かれた「屏風絵展」で、私淑していた横山大観からの影響を想起させる連作《瀟湘八景》を発表しています。世界中から大量の情報が流れ込む時代の渦中であって、苦悩しながら日本画独自の存在理由を追い求めていた横山にとっては、大観が水墨表現によって切り開いた画境がただひとつの道標であったのかもしれませんが。

(伊能あずさ)



図1 横山操《雪原》1963年、紙本彩色、242.0cm×605.0cm、当館蔵
© Masao Sugita 2023 /JAA2300025



図2 横山操《峡》1959年、紙本彩色、190.0cm×390.0cm、新潟県立近代美術館・万代島美術館蔵
© Masao Sugita 2023 /JAA2300025

註

- (1) 富山秀男「横山操の転進」『三彩』160号、1963年、62ページ。
- (2) 前掲1、63ページ。
- (3) 中原佑介「ワイド日本画 —横山操の新作—」『芸術新潮』14巻3号、1963年、124ページ。
- (4) 三木多聞「月評 個展・グループ展」『美術手帖』219号、1963年、139ページ。
- (5) 静けさを感じる絵画作品等を形容する言葉として用いられることが多い。

御礼

横山操《雪原》の修復のため、2022年9月30日から12月31日まで、ガバメントクラウドファンディング「日本画家・横山操の大作《雪原》を修復・公開したい! 佐久市立近代美術館

収蔵作品保存修復プロジェクト)を実施しました。多くの皆様からのご協力とご支援をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

長野県立美術館交流名品展 佐久からひろがる信州の近現代美術

令和4年7月16日(土)～8月28日(日)

本展覧会は、令和3年4月にリニューアルオープンした長野県立美術館(以下、県立美術館)との協働企画です。両館のコレクションの接点を探り、県立美術館から53点、当館から31点、川村吾蔵記念館から4点の作品(資料)を選びすぐって展示しました。

展覧会の中心に据えたのは、佐久市ゆかりの作家である岡村政子(1858-1936)、川村吾蔵(1884-1950)、神津港人(1889-1978)です。川村吾蔵は当館及び県立美術館の収蔵作家ではありませんが、同時期にアメリカで活動していた国吉康雄、臼井文平の作品が県立美術館のコレクションに含まれていることから、地域の皆様に「牛のGOZO」の背景を知ってもらう好機と捉え、川村吾蔵記念館から特別に《ホルスタイン乳牛 牝》や新収蔵資料である当時の旅券などを借用しました。

会期中には県立美術館の協力のもと、様々なイベントを開催しました。「長野県立美術館 館長講演会」では松本透館長に登壇してもらい「日本人作家の海外体験・活動—その今昔」をテーマに、菱田春草から池田満寿夫まで、多くの出品作家について話してもらいました。「アートをやべって見ませんか?」は、当館では初の開催となる「対話型鑑賞」イベントでした。作品に関する知識を一旦排して、参加者の皆様と対話しながらじっくりと作品を鑑賞することは、美術館職員にとっても刺激的な体験でした。県立美術館学芸員によるギャラリートークでは、二人の学芸員にそれぞれの視点から作品を解説してもら

いました。

ところで、本展覧会のタイトルにある「交流」には、収蔵作品だけでなく、学芸員同士の交流という意味合いも含まれています。私たちにとっては、県立美術館の皆様のもつ豊富な知識や経験を学ぶ貴重な機会となりました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。

(伊能あずさ)

展示風景



Column 1

対話型鑑賞

企画展「長野県立美術館交流名品展」では、長野県立美術館よりファシリテーター[※]を招き、対話型鑑賞イベント「アートをやべって見ませんか?」を開催しました。参加者のなかでも印象的だったのは小学生の兄弟でした。活発な弟さんが次々と発言するのに対して、内気そうなお兄さんは、始めは戸惑うように黙っていました。ところが終盤になり、ある作品を前にした途端、お兄さんが溢れるように話し始めました。それからは、兄弟で想像を膨らませて生き生きと語り合い、終了時には「楽しかった!」と声を弾ませていました。「美術館に来て楽しかった!」そんなシンプルな体験がいつか美術に親しむきっかけになったらいいなど、対話型鑑賞の可能性を感じました。

(由井はる奈)

註 ファシリテーター【facilitator】話し合いの参加者の合意形成・相互理解を実現するために支援する人のこと。進行しながら参加者に発言を促したり、話の流れをまとめるなどの役割を担う。



Exhibition Report 2

並木功展 一期一会

令和4年9月17日(土)～11月6日(日)

並木 功(1956-)は、佐久市出身、在住の日本画家です。愛知県立芸術大学で日本画家・片岡球子(1905-2008)に師事したのち、日本美術院展を中心に活動を続けています。大学卒業後からアイヌや南米の人々、近年ではバレエダンサーなどを取材し、一貫して人物画を描き続けてきました。また、信州の豊かな自然を描く風景画も数多く発表しています。本展では、人々や風景との出会いを大切にしてきたという作家の40年余にわたる画業を作品68点により振り返りました。

会期中には、アンデス音楽演奏家の中田秀一(1953-)によるギャラリートークも開催しました[※]。民族楽器のケーナの音色が響くと、まるで南米の風が吹いたように会場の空気が一変しました。ケーナは葦や竹でつくる縦笛で、その歴史は紀元前にも遡るともいわれていますが、その音色の中には懐かしさとともに、人がなぜ音楽を奏でるのか、人はなぜ文化とともに生きるのか、という問いへの答えがあるように思われました。

並木もまた南米の文化に惹かれ、3度南米を訪れて取材し、現地でも出会っ

並木 功《インディオ》1993年、紙本彩色、140.0×72.0 cm、作家蔵



た人々を作品に描いてきました。並木の描く素朴で生活感あふれる人々の姿は、アンデスの音楽と同じように、人が人として生活することの美しさや厳しさを観る者に感受させます。

並木は、風景画でも「観光地よりも取材先で偶然に出会った景色に惹かれる」と語っていますが、おそらく、並木が惹かれるのは、人も風景も、虚飾のない自然そのものの輝きなのかもしれません。並木はその輝きを画家として日本画に表現しようと試行錯誤を重ねてきました。虚飾にそれないように堅実に一筆一筆を積み重ねた作品の数々は、展覧会を訪れた鑑賞者に穏やかな微笑みをもたらしていました。

(由井はる奈)

註 2022年(令和4年)10月22日実施。コロナ禍でイベントを行うのは約3年ぶり。

月替わりコレクション 紹介

佐久市立近代美術館の収蔵作品(解説つき)を一ヶ月ごとに紹介しています。

佐久市立近代美術館のホームページをご覧ください。

<https://www.city.saku.nagano.jp/museum/event/webexhibition.html>



佐久が生んだ「おんな」 岡村政子ともろさわようこ

岡村政子(1858-1936)は、岩村田藩の重臣であった山室直高の四女として江戸の藩邸で生まれました。岩村田で幼少期を過ごしたのち16歳で上京し、正教会の女子神学校を経て、1876年に日本初の官立美術学校として開設された工部美術学校で本格的に西洋画を学びました。その後、夫の岡村竹四郎とともに石版印刷業「信陽堂」を設立し、福沢諭吉の『時事新報』の付録や当時流行していた額絵などを手掛けました。

美術館の立場から政子の事績について説明するならば、概ねこのような内容となるでしょう。しかし、ひとりの女性として政子の生涯を辿るとき、私達の眼には、上述のイメージとは異なる像が結ばれます。

北佐久郡本牧村(現佐久市)出身の女性史研究家であるもろさわようこ(1925-)は、1966年6月から1968年8月まで信濃毎日新聞に連載された「信濃のおんな」の中で、岡村政子を取り上げました。「信濃のおんな」には、政子のように何らかの分野に秀でた女性に限らず、古代から現代まで、信州の各地に暮らしていた名もなき女性たちの姿が、地道な研究と取材に基づいて丹念に描写されています。

岡村政子の記事の前半では、政子の甥である山室次郎による伝記『岡村政子伝』(1962年)に依拠しながら来歴を丁寧に伝えています。後半では、日本の資本主義の揺籃期を生きたクリスチャンの女性である政子に、もろさわの視線が鋭く向けられます。

「彼女がその画業を豊かに発展させてゆくことができなかったのは、夫とともに成る事業のほか、家事と育児の重い負担が、彼女の身うごきを不自由にしたからであろう。政子は二男三女を産み育てている。この子産み・子育ての時期は、信陽堂の事業発展の時期とも重

なった。石版画家としても、政子は信陽堂のしごとになくはならぬ人である上、住みこみの十数人の生徒たち(注=徒弟のことを信陽堂では生徒とよんだ)の食事の世話から身の配慮もまた、彼女の責任だった。」⁽¹⁾

「日本の資本主義がまだ若かった明治期。努力と勤勉によって、政子と竹四郎は産をなした。そして、キリスト教によって自己をきよめ、模範的なブルジョアジーとして人々の尊敬をうけた。だが、政子が、日常、健康がすぐれなかったのは、勤勉であるがゆえにおちいる過労に起因していた。」⁽²⁾

政子の作品の多くは関東大震災で焼失したため、現在私たちが見ることができるのは信陽堂が発行した一部の石版画などに限られます。もろさわが執筆した記事は、高度な描写や石版技術の裏側にある社会的背景を浮き彫りにし、現存する希少な作品の価値への重層的な理解を促します。また、信濃毎日新聞記者の河原千春氏の編著による『志縁のおんな —もろさわようこことわたしたち』(一葉社、2021年)が刊行されるなど、近年もろさわの著作や活動への関心が高まりつつあります。佐久が生んだふたりの「おんな」⁽³⁾の仕事が、これからの時代、更に顧みられることに期待します。

(伊能あずさ)



岡村政子《美人新聞を読む図》(時事新報第五千号付録) 1897年、紙・多色石版、48.5cm×33.5cm、当館蔵

註

- (1) もろさわようこ『信濃のおんな 上』未末社、1969年、279ページ。
- (2) 前掲1、281ページ。
- (3) 河原千春編著『志縁のおんな —もろさわようこことわたしたち』(一葉社、2021年)所収のインタビューで、大串潤児氏は「おんな」について以下のとおり言及しています。「六〇年代に一般的だった婦人ではなく「おんな」という言葉をタイトルに使った意味をわれわれは考えるべきでしょう。社会的な位置付けの中で他から与えられた「主婦」のような名称ではなく、社会的身分や地位は別として、一人一人が自分らしく、「私は私自身」であるという思いをすくい上げやすい表現です。」(116ページ)

Column 2

駒場公園に 彫刻がある件に ついて

佐久市立近代美術館開館の前年、長野県は創造の森「駒場公園」^註を、東信地区広域生活圏における「都市公園」に、創造活動やスポーツ等が行える機能を付加した文化公園として、1982年に完成させました。公園内には、北側のエントランスゾーンを抜けた先の噴水のある広場を中心に、社会教育施設やスポーツ施設等を配し、さらに彫刻を設置しました。

屋外のブロンズ彫刻13点は、当館設立のきっかけとなった油井一二(1909-1992)の収集品です。野外劇場に圓鑄勝三《緑のリズム》のように、設置場所や台座のデザイン等を、油井の依頼を受けて担当したのが彫刻家の田辺光彰でした。

田辺は公園等の公共空間と人の交流を制作のテーマの一つとしていたことから、この仕事を歓迎し、何度も佐久を訪れるなかで、自身の代表作の一つとなる彫刻《さく》を構想しました。

《さく》は高さ40mのステンレスの塔と延長20mの佐久石の回廊で構成される、建築物にもみえる作品です。これを公園内に設置するうえでの課題もあり、当時、副知事が現地を視察したとも聞いています。はたして《さく》は、油井の資金協力も得て美術館の前庭に具現化され、1983年の開館をもって当館最大のコレクションとなりました。

公園は完成から40年余が経過しました。開館40年を迎える当館も令和4年に「個別施設計画」を策定し適正な施設管理について検討しています。今後「駒場公園」内の美術館として「再構築」を考えていかなばなりません。

(土屋信)

註 現在は佐久市の管理施設

《さく》について

昨年8月5日、服飾デザイナー三宅一生(1938-2022)が亡くなりました。広島出身の三宅は高校生の時イサム・ノグチ(1904-1988)設計の平和大橋のデザインに感銘を受け、その進路に大きな影響を受けたと言われています。⁽¹⁾《さく》の作者田辺光彰(1939-2015)も、このイサム・ノグチに傾倒し影響を受けたアーティストです。この三人は、ノグチが「もし、芸術を通じて世界がもっと友好的に、もっと人びとの手の届く、もっと理解しやすい、意義あるものになるならば、芸術でさえなんらかの存在理由をもちます。」⁽²⁾と語ったように、自分たちの「作品」が社会の中で果たす役割への強い意識を持っていたように思えます。

田辺光彰の《さく》は、1979年から1981年にかけて毎年野外彫刻展で受賞を重ねてきた田辺が、1982年～83年に取り組んだモニュメンタルな大型作品です。1976年の《山内によする》を凌ぐ規模を持ち、その後横浜港突堤に制作された「遙かなるもの・横浜」の第一部作「貝」第2部作「花壇」へと続き、さらに海外へと展開される大型モニュメントのさきがけとなりました。

美術評論家・野村太郎(1927-2014)は「佐久市出身の実業家で『新美術新聞』の創刊者である故油井一二氏は、市立美術館の建設に私財を投じた人物であるが、作品『さく』を生涯で最終にしてもっとも斬新なコレクションとして美術館に贈った。」⁽³⁾と述べています。この「斬新な」という言葉は、《さく》が、これまで私たちが普通に考えてきた絵画や彫刻などの「美術」の枠組みからは、外れたところに成り立つ作品である、という意味ではないかと思われる。

確かに《さく》を初めて見た人の印象は「これは何だろう?」かもしれません。何もなければ単なる公園の中の芝生の広場にすぎない場所を(それはそれで貴重な場所ではありますが)、人々がそ

に参加することによって、佐久の光と風への想いを呼び覚ます「作品」として成立させようとしたのが、田辺の構想ではなかったかと思えます。少なくとも《さく》の機械的な構造はそうなっています。

人々の参加という点では、三宅一生もエイボックー A-POC(A Peace Of Cloth・一枚の布)という、チューブ状の生地から着る人が服を切り出してつくるニットのシリーズを生み出し、「着る人が参加する」というコンセプトを探求しました。⁽⁴⁾「作品とは、創作する者を彼らの本質において可能にするものであり、そしてその本質からして見守る者を必要とするものである。」⁽⁵⁾とするなら、人々の参加は芸術作品の本質ともいえるでしょう。

しかし今や問題は逆なのかもしれません。つまり、私たちの社会はいわゆる「芸術」を”コンテンツ”として消費してしまい、私たちの人間性に深く関わるものとしての、真の意味での芸術を必要としないかのようにも見えるからです。イサム・ノグチは初めに引用した講演の最後を、科学技術の急速な進展によってもたらされる未来に対して「科学には芸術が必要です。そして芸術なしでは、人びとの健全さと平衡があやぶまれるのです。」と締めくくっています。

私には、《さく》が「あなた達は私を必要としているのか?」と問いかけているようにも思えます。

(小山雅比古)

註

- (1) 読売新聞オンライン(2015年12月6日朝刊インタビュー記事再録)
<https://www.yomiuri.co.jp/life/20220809-OYT1T50188/> 2023年3月6日閲覧。
- (2) イサム・ノグチ「私の歩んできた道」(京都賞受賞講演 財団法人稲盛財団)
https://www.kyotoprize.org/wp-content/uploads/2019/07/1986_C.pdf
2023年3月6日閲覧。
- (3) 野村太郎「田辺光彰の仕事 1976～2005」
Mitsuaki Tanabe Official Web Site(<http://portwave.gr.jp/tanabe/index2.html>)
2023年3月6日閲覧。
- (4) <https://www.isseymiyake.com/ja/brands/apocable> 2023年3月6日閲覧。
- (5) マルティン・ハイデッガー著、関口浩訳『芸術作品の根源』平凡社、2008年、116ページ。

図1



図2



図3



- 図1 広島市 平和大橋 (写真: PhotoAC)
図2 《さく》風導塔頭頂部 風取れ口
図3 田辺光彰《さく》1983年
図4 田辺光彰《山内によする》1976年
図5 《山内によする》プレート



図4



図5

編集後記

Saku Museum News (佐久市立近代美術館ニュース) vol.2は佐久市立近代美術館のホームページでもお読みいただけます。美術館の1年を振り返り、学芸員の関心事を広く皆様にお伝えすることを念頭におき編集しています。当美術館は佐久地域の皆さまに寄り添った教育・研究機関としての役割を担っています。掲載した記事について感想やお気づきの点、佐久に縁のある作家情報などを、お寄せくださいましたら幸いです。当美術館の調査研究、教育普及に役立ててまいります。(館長)

佐久市立近代美術館ニュース No.2

発行日 2023年3月27日

編集・発行 佐久市立近代美術館 油井一二記念館

〒385-0011 長野県佐久市猿久保35-5 (駒場公園内)

TEL 0267-67-1055 FAX 0267-67-1068

<https://www.city.saku.nagano.jp/museum/>

デザイン・印刷 株式会社アズ

